

# 私学の魂

湘南白百合学園中学・高等学校

## 湘南の風そよぐ緑豊かなキャンパスの 爽やかな校風と活気ある授業のもとで、 白百合の花のように、優しく強く愛のある 世界の光となるサーヴァント・リーダーを育てる

仏シャルトル聖パウロ修道女会によって、1936（昭和11）年に設立された乃木幼稚園を前身に、現在は江の島と相模湾、富士山までを一望できる片瀬山の高台に、深い自然の緑に囲まれた別天地のような教育環境を形成する湘南白百合学園中学・高等学校。ここでは、全国の白百合学園の姉妹校のなかでは比較的新しい約80年の歴史のなかで、カトリック系の女子校として、1学年約180名の小規模で家族的な雰囲気のもと、グローバルな視野と奉仕の精神をもつ“サーヴァント・リーダー”を育てる教育が実践されてきました。

今回は、すでに20年前から、同校の総合学習のなかで、独自のスタイルのアクティブ・ラーニングを実践してきた中学主任の富岡康子先生と司書教諭の井上三奈子先生をお話を中心に、湘南白百合学園の教育の特色についてお話を伺いました。



司書教諭の井上三奈子先生



中学主任の富岡康子先生

### DATA

1

#### 湘南白百合学園中学・高等学校

沿革 1936（昭和11）年 片瀬乃木幼稚園設置認可  
1938（昭和13）年 乃木高等女学校設置認可  
1946（昭和21）年 校名を乃木高等女学校から湘南白百合高等女学校と変更  
1947（昭和22）年 学制改革により湘南白百合学園中学校設置認可  
1976（昭和51）年 片瀬目白山に新校地購入  
1979（昭和54）年 新校舎落成・移転  
1996（平成8）年 シャルトル聖パウロ修道女会創立300周年・本学園創立60周年  
2011（平成23）年 創立75周年記念講堂（白百合ホール）落成。創立75周年記念諸行事

校長 谷口 貞女（スール・マリ・セシル）

所在地 〒251-0034 神奈川県藤沢市片瀬目白山4-1  
TEL：0466-27-6211  
<http://www.shonan-shirayuri.ac.jp/chukou/>

交通 JR東海道線・小田急線「藤沢駅」から江ノ電バス「片瀬山入口」下車徒歩3分。  
湘南モノレール「片瀬山駅」下車徒歩3分。江ノ島電鉄「江ノ島駅」下車徒歩15分。

## 世界に開かれた、愛ある 「サーヴァント・リーダー」の育成をめざす

東京都九段の白百合学園、神奈川県強羅の函嶺白百合学園など、女子の中高としては日本全国に計8つの姉妹校(幼・小・中・高)を持ち、白百合女子大学・大学院、幼稚園、乳児院などを経営するシャルトル聖パウロ修道女会。

1878(明治11)年に3人のスール(修道女)がフランスから派遣され、函館の地で宣教を始めてからすでに130年余。「白百合学園」という呼称は国内では広く知られ、すべての姉妹校に共通の校名と校章、制服は、各地で人々に親しまれ、広く愛される存在となっています。

白百合の花にちなんだ校名と校章は、キリスト教の世界で「白百合」が、聖母マリアの清純さ、優しさ、凜とした強さをあらわす花であることに由来し、各地の白百合学園の教育を象徴するものでもあります。白百合学園に学ぶ生徒が、優しさのなかにも強固な意志を感じさせる白百合の花のようにあってほしいという願いを込めて作られたものです。校訓の「従順・勤勉・愛徳」の「従順」は真理に従うよろこび、「勤勉」は能力をみがき役立てるよろこび、「愛徳」は互いに大切にしようとする意を意味しています。

「ごきげんよう」という挨拶も全国の姉妹校に共通で、取材に訪れたこの日も、校内を歩き交う在校生が次々に「ごきげんよう!」と明るく挨拶してくれました。

そして、この湘南白百合学園中学・高等学校は、そうした全国の白百合学園姉妹校のなかでも、最も明るく大らかな校風を持っているように感じられます。

それは、この湘南・片瀬山の海の香りのする高台の、空と海の青、木々の緑、白く映える校舎と明るい陽射しのコントラストに囲まれた“彩りあふれる”教育環境で、多感な中高6年間をゆったりと過ごすことができるからでしょうか。

正門に入って校舎に向うならかな坂道の途中には、ルルドの小さなマリア像が登下校の生徒を見守り、校舎前のゆるやかなカーブの角には、優しい表情のマリア像が、やってくる生徒を包み込むように大きく手を広げて迎えてくれます。

こうした神の恵みと自然の息吹に包まれたロケーションのなかで、美しい聖歌の歌声と祈りから湘南白百合学園の生徒の一日が始まります。

一人ひとりの個性と能力の賜物(神から与えられたタラント)を最大限に活かせるよう、知的・情操的・精神的な鍛錬の機会を生徒たちに多く提供することが、



自然の緑に囲まれた高台のキャンパスには爽やかな湘南の風が吹き抜ける。

湘南白百合学園の教育の特色です。そして、それらを通して養われる人間力をもって、周囲の人々に喜んで奉仕し、明日の世界の光となるような愛ある女性……サーヴァント・リーダーを育てることが湘南白百合学園の教育のめざすところです。

## それぞれの課題の「評価」も共有して、 研究～レポート～発表に取り組む

取材に訪れたこの日、湘南白百合学園の教育の一端を話してくれたのは、約20年前から行われてきた独自の総合学習のなかで、今後の日本の教育の課題ともいわれている「アクティブラーニング」を実践してきたというお二人の先生。中学主任で物理がご専門の富岡康子先生と司書教諭の井上三奈子先生でした。

同校の2015(平成27)年度の「総合的な学習」における各学年のテーマと学習形態を見せていただくと、そこには中高6年間を通しての探究テーマと学習形態(授業担当の中心、テーマの設定者、研究の主体者、配当時期、まとめの方法、外部講師の招聘、校外見学)などが一覧表にまとめられています。

たとえば中1では、①「お互いを知る」、②「ボランティアへの理解を深める」、③「学校を知る」、④「ネチケットを理解し、安全にITを利用する」といったテーマで、担任の先生を授業担当の中心にして個人研究を進めていきます。

中2では歴史や平和、命の大切さなどをテーマに、中3では、環境問題、進路



屋上からは富士山や相模湾、江の島を一望できるロケーションにある。

などについて学んでいきます。今回はこの中3で取り組んできた「身近な事柄から実験・観察を通して環境問題を検証する」というテーマと、同じく中3で行ってきた「弁護士の出前授業による『あたらしい物の見方・考え方』プログラム～『対立と合意・効率と公正』という概念を使って～」という授業の展開について、詳しくお話をお聞きしました。

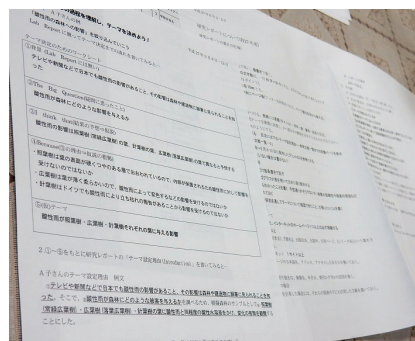
まず、「身近な事柄から実験・観察を通して環境問題を検証する」という取り組みでは、理科の先生が授業担当の中心になり、生徒は個々人で選んだテーマについて、研究～レポート作成～パワーポイントを使った発表～英語のabstract（抄録）作成と展示までを通年で行います。そのための年間予定表には、その手順が隈なく明快に示されています。

中3の1学期には、4月中旬の初回オリエンテーション「コンピュータ室の使い方、ワードの基本操作」から始まり、インターネットでの調べ方、テーマの決め方、研究レポートの書き方、実験上の注意など、研究に必要な姿勢と注意事項、技術的なことを学び、2学期からは研究レポートの作成と提出を経て、パワーポイントの作成に取り組みます。

11月から毎回の授業で7名ずつ、順にクラス全員が発表（プレゼン）を行います。その欄には「聴く側はcritical thinking（批判的思考）で」と明記されているのも印象的でした。

全員の発表が済むと、最後はレポートの抄録を英文にして展示します。その間、1年間の振り返りプリントも配布され、生徒自身がリフレクション（内省と熟考）できるように工夫されています。さらに再度「パソコン技術をさらに高めるために」という講義もおこなわれ、授業の最終回では、代表者による1人10分の発表が行われ、通年の研究が締めくくられます。

研究テーマは生徒が自分で選びますが、まず最初に、そのテーマ決定のためのワークシートに沿って、①背景→② The Big Question（疑問に思ったこと）→



テーマ設定のワークシートを書いていく過程で、自ら問いを立てて考えを深めていく。

③ I think that（結果の予想→仮説）→④ Because（③の理由→仮説の根拠）→⑤（仮）テーマ設定、を順に書き出し、その①～⑤を

もとに、自分の研究レポートの「テーマ設定理由（Introduction）」を書いてみます。

こうした手順を踏むなかで、自分の頭で「問い」を立て、それをどう探究し

ていくか、生徒自身が考え抜く一連のアクションのなかで一人ひとりの生徒のアタマが活性化してフル稼働する、その状態を同校では「アクティブ・ラーニング」と考えています。

1年間の研究期間中には、日本原子力文化振興財団やガスの科学館から派遣講師なども招いてお話を聞くことで、環境問題についての情報も多面的に得て、生徒それぞれが問題意識を高め、研究内容を進化させていくことができるといいます。

見せていただいた個々のレポートはまさに力作揃い。さらに、この成果物をもとに全員が発表（プレゼンテーション）まで行うことで、表現力・発信力も高めていくことが目標です。

とくに注目されるのは、この一連の研究を通して、評価の観点とポイントが生徒にも示され、先生と生徒の間で明確に共有されていることで

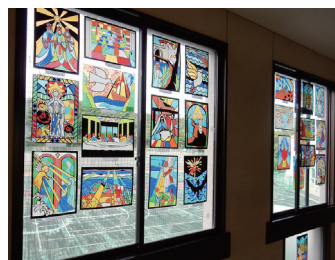


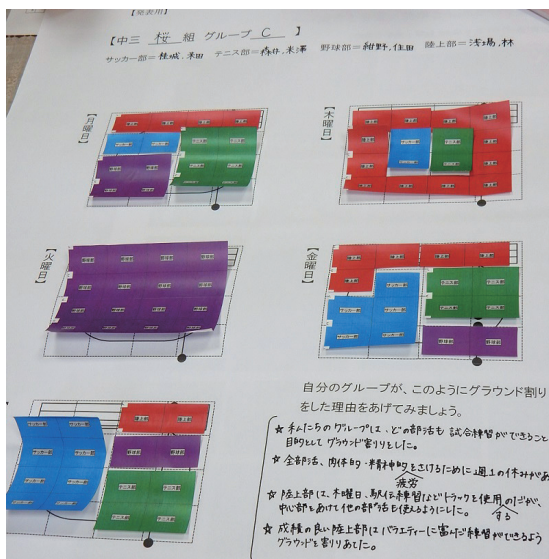
研究レポートの作成過程で「環境問題」への意識と向学心を高める生徒もいる。

す。年間予定のプリントには、「成績は『研究レポート』、『発表する力』、『発表を聴く力』、『1・2学期のワークシート』を資料として行います。『研究レポート』、『発表する力』には実験計画書とプレゼンテーションファイルの提出状況が含まれます」と明記されています。

さらに毎回の授業（テーマ）への取り組み姿勢や提出物、発表にも、それぞれ評価の観点を示され、パワーポイントでの発表（プレゼンテーション）の際には、その日の発表者への「評価表」がクラス全員に渡され、「視覚的にわかりやすく説明する工夫が凝らされていたか」、「強調すべきところを印象付けるような読み方がされていたか」、「アイコンタクトができていたか」など、7項目にわたって個々が評価をつけるようになっています。

「回を重ねるうちに、クラスの仲間のプレゼンを





互いの要求・主張と公平・公正・効率を考え、話し合っていく過程でさまざまな体験ができる。

(critical thinking で) 聞く姿勢はかなりできてきますが、今後はもう少し『質問力』を高められると良いと感じています」と井上三奈子先生。

確かに、傾聴する姿勢や話し手への目線などに加えて、コメント力や質問力も、多様な人々とのコミュニケーションには大切な要素です。そうしたことも意識されている同校の「総合的な学習」は、今後の時代に求められるスキルを身につけ、他者を理解する感性も育ててくれる貴重な場となっているようです。

こうして発表を互いに評価させるほか、①必要に応じて自己評価表を提出、②論文は必要事項をクリアしているかチェックし、文章でコメントを伝える、③1年間を通した活動に対して総合通知表を出す、④「5つの到達目標」に対して、それぞれA・B・Cの評価と教師のコメントを出す、といった「検証・評価の方法」も教員間では設定～共有されています。

ここでいう「5つの到達目標」とは、①課題設定能力、②課題への主体的・創造的な態度、③問題解決能力・情報活用能力、④まとめる能力・プレゼンテーション能力、⑤内容の深化・統合、とされています。ここには、いままさに「2020年大学入試改革」に象徴される日本の教育改革の課題として掲げられているチカラのほとんどが含まれているといってもいいでしょう。

**『対立と合意・効率と公正』の概念を使って、相互理解と協調・協働力を身につける。**

この取材でもうひとつ詳しくお聞きできたのは、や

はり中3で取り組む、グループを研究の主体とした「弁護士の出前授業による『あたらしい物の見方・考え方』プログラム～『対立と合意・効率と公正』という概念を使って～」という授業の展開です。

こちらは横浜弁護士会に所属の弁護士さん(8名)を外務講師として招き、各グループで、サッカー部・テニス部・野球部・陸上部の4つの部活動の代表者という役割に別れて、月曜から金曜までの5日間の活動に使う「グラウンド割り」を話し合って決めていくというワークショップを行うプログラムです。

ここでは、それぞれ自分の部活の要求と、互いの種目の練習に必要な特性なども主張～理解し合って使用方法を決めていくために、公平・公正・効率を考えたいうで、現実の生活で折り合えるところを探っていきます。その過程で、協調～話し合い～決定に至る経験と感覚を身に着けていきます。

ただしここでは「logical thinking (論理的思考)」と「critical thinking (批判的思考)」の両方を使って考え、相手の立場も理解しようとする姿勢でコミュニケーションしていく必要があります。湘南白百合学園には存在しない、サッカー部や野球部の要求や競技特性も、その部活の代表者の立場に立って考えていかなければいけないので、想像力も必要になります。

そこで話し合って決められた結果の例が左上の写真です。週に一度はグラウンド全面を使って打撃や連携プレーの練習をしたいという野球部や、日頃の競技成績も良く、同じく一度はグラウンドを大きく使ったランニングコースで練習



弁護士さんによる出前授業で話し合う様子。

したいという陸上部の要求を取り入れ、ユニークな「グラウンド割り(使用方法)」となっています。よく見れば、週に一度もグラウンド全面を使えないサッカー部や、公式テニスコートの広さを確保できるかどうか微妙なテニス部など、

不満や矛盾の要素もあるのですが、ひとまず話し合いで折り合って結論が出せたようです。

前後は各グループの「グラウンド割り」の結果について、それぞれのグループから発表することで、互いにいろいろな気づきを得ることもできるといいます。

「さらに生徒間やグループ間で議論をする時間などが取れると、もっと良いのですが…」と中学主任の富岡康子先生。

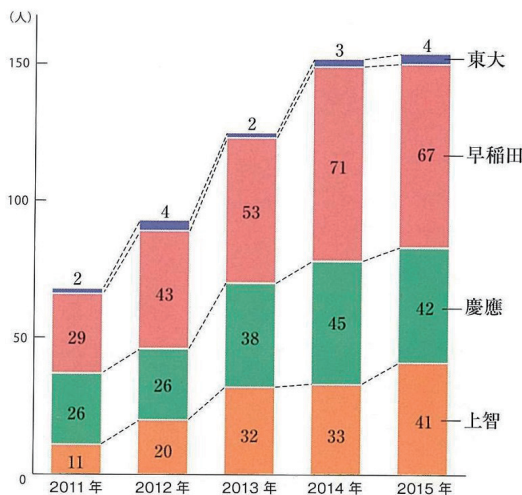
物理がご専門で、大学受験指導のベテランとしても力を発揮し、多くの生徒を難関大学合格に導いてきたという富岡先生は、こうした「アクティブラーニング」を湘南白百合学園で導入～実践するために、「言語技術」をはじめ、さまざまな教育プログラム、学習スタイルの研修に自ら参加し、研究と研鑽を重ねてきたといいます（…教頭の柳宣宏先生談）。

同校では、こうしたアクティブ・ラーニングを実践する一方で、もうひとつの課題として掲げてきた「大学受験への対応（＝進学実績の増加）」という、一見矛盾するようにも思える課題も見事にクリアして、国立大学や早慶をはじめとする難関大学への合格実績を躍進させていることも注目に値します。つまり、こうした学習スタイルの実践が、大学受験に際しても効力を発揮していると解釈してよいのではないのでしょうか。

## 中1ながら「総合・創造」の力を使って、生徒が作り上げるユニークな書籍POP。

このほか、湘南白百合学園の「総合的な学習」を、

### ●東大・早慶上智大合格実績（延べ数）



神から与えられたタラント（能力）を磨き他者や社会に立てる力を身につけるために、大学受験にも正面から挑んでいき、目覚ましい成果をあげている。

富岡先生とともに形作ってきた司書教諭の井上三奈子先生から、中1の国語の授業で行う「本のPOP作り」の様子も伺いました。同校では中1から「ビブリアバトル」にも



本のPOP作りでは感性に加えて「総合・創造」の力も育てていく。

参加するなど、読書

教育には力を入れてきましたが、この「POP作り」でも、生徒は予想以上に豊かな発想と感性で、ユニークな作品を作り上げています。

「POP作り」は、誰でもできる課題のように思えますが、本の内容をしっかりと理解して、その魅力をコンパクトに凝縮して伝える技術は、「知識・理解」→「応用・分析」の力を超えて、その先の段階にある「総合・創造」の力を必要とするものです。その意味では、湘南白百合学園の総合学習では、「Creative thinking（創造的発想）」の力を育てる領域に、すでに中1から踏み込んでいるという見方さえできるでしょう。

単一の教科の枠を超えて総合（統合）的な学習をプロデュースすることも可能な、司書教諭の資格をもつ井上先生ならではの仕掛けということもできるでしょう。あるいは、感性豊かな湘南白百合学園の生徒だから、こうした課題にも無理なく楽しく取り組んでいけるのかもしれません。もちろん、生徒が作ったユニークな作品の数々は、実際に井上先生が司書を勤める同校の図書室の書籍に飾られる機会もあるといいます。

## 爽やかな校風に希望を乗せて運ぶ、神奈川エリアの“希望の私学”！

この日、ほかに授業の様子を見せていただいたのは、中学1年生の「音楽」と、高校2年生の「体育」の授業。そして、中学3年生の習熟度クラスの「英語」の授業、中学1年生の「理科」の授業でした。

音楽の授業では、歌の試験が行われていたのでしょうか。童謡「赤とんぼ」を、



音楽の時間。毎朝の礼拝でも歌い、祈ることが湘南白百合学園の日常でもある。



小規模な女子校としては広い体育館。バスケットなど運動部が盛んなのも特徴のひとつ。

最初はちょっと恥ずかしそうに、それでも一生懸命歌っている中1の生徒さんの歌声は、これから6年間、彼女たちが歌い続けていく聖歌のような美しい響きがありました。

体育では、広い体育館の半面に設けられた4面のコートで、バドミントンの練習に取り組む高校2年生と、その向こう側の半面でバスケットボールのゲームをする中学生の屈託のない姿が見られました。

ネイティブのタラ先生による、中3習熟度別クラスの英語授業では、軽やかな発声で発音で先生の後に続く生徒の明るい英語を聞くことができました。そういえば湘南白百合学園では今春から、中1から高3まで希望者対象で行う国内・海外の研修を「タラント・リリア（語学研修）プログラム」と名付け、この6年間の取り組みを体系化して、これまで以上に力を入れていく方針を打ち出しています。これは聖書のなかのたとえ話にある「タラント（与えられた能力・才能）」とラテン語の「リリア（百合）」からつけられた名称で、英語力はもちろん、それだけではなく、グローバル社会に必要なスキルを育て、他者のために喜んで尽くす人材「サーヴァント・リーダー」の育成をめざすプログラムです。



ネイティブの先生による授業では、軽やかな発声で英語のキャッチボール！

理科では、中1の生徒たちに、プロジェクターを使って実験器具を映し出し、次回の実験の準備と心得を伝えていました。加藤先生が写真を見せて伝える説明に対し、教室のあちこちから「どうしてですか?」「そうするとどうなるの?」と、反射的に次々と質問の声があがり、それに先生が一つひとつ答えている様子が印象的でした。生徒の「なぜ?」「どうして?」という発話を日頃から受け入れているやり取りが想像できる授業で、これもまた“湘南白百合らしい”と思える素敵な授業風景でした。

今回の取材で、実際に授業の様子を見せていただき、熱心な先生方が工夫している授業展開の具体例を聞かせていただいたことで、この湘南白百合学園という、



生徒の「なぜ?」「どうして?」という声をつかんでリズムカルにやり取りをする理科の授業

80年の歴史をもつカトリック系の女子校が、いままさに“希望の私学”として首都圏に存在し、なかでも神奈川の中高一貫教育を新たにリードする「クリエイティブ・スクール」であることを実感しました。

湘南の高台のキャンパスから、爽やかな校風に希望を乗せて運んでくれる湘南白百合学園に、今後の神奈川エリアの中学受験と私立中高一貫校を活気づけてくれる、ひと筋の光を見つけたような一日でした。

